

患者図書室環境変化と提供情報への患者意識

— 病院事情により縮小した患者図書室の一例 —

家田史子

青梅市立総合病院 図書室

青梅市立総合病院（以下：当院）は、2003年10月に患者図書室を設置したが、“がん支援相談センター”開設のため、2015年1月に11年続いた患者図書室は、独立した部屋からオープンスペースの一角に縮小移動し、環境が大きく変化した。

当院の患者図書室は、司書が常時在室せず、朝・昼・夕と3回訪室して整理等を行うシステムである。このシステムで、与えられたスペースの中、今まで守ってきた当院患者図書室の癒しを含む空間環境をどう維持し表現するのか、患者さんはこれまで通り利用してくれるのか、不安と戸惑いの中、活動を再開した。

今までの図書に関する工夫に加え、壁面のレイアウトや限られた書架の位置などの視点を変えてみた。オープンであることをあえて表示した。すると、以前より多い利用となっていた。

旧患者図書室を開室した当時、病気に関する図書を読むという意識を感じなかった。入室しても雑談や物珍しさが先立ち、新聞や雑誌や一般書がないなどの苦情と共に医療情報のみの患者図書室の存在を否定された。

今回は、このような患者図書室としての“一からの出発”ではなかった。旧患者図書室活動の効果が表れ、リピーターの患者さんの活用が、新しい患者さんを招き入れた。

個室としての落ち着いた静けさを求めている患者さんは、遠のいてしまっているが、またいつか立ち寄ってもらえるようにと意欲が湧く。紛失図書もある。必要な情報が見つかった証拠だと推察する。外来受診の間、持ち出している患者さんもいる。給茶機が患者図書室の隣にある。“飲食禁止”の表示板を撤去した。夕方薄暗くなった院内でもこのコーナーだけは明るく照らされ、患者さんの姿をみる。真摯にいつでも提供している情報は受けとめられていた。

患者さんの自発的な“疾患への問いかけ”に答えるべき心の静寂を満たすスペースは、恵まれた環境でなくても存在しなければならない。この存在の一步が、次に用意されている大いなる患者図書室への活力となっていく。患者図書室で生まれる患者さんの無意識なナラティブは、提供情報により引き出され、ご自身を大切に見つめ見守る術となっていくと考える。